

<b>Title</b>	QOLD 評価測定尺度の基礎的研究(VII)
<b>Author(s)</b>	丸山, 久美子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,18(1) ; 93-102
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=106">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=106</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## QOLD 評価測定尺度の基礎的研究 (VII)

現代青年の実存的痛みに関する認知構造

丸 山 久美子

A Study of Scaling of Life and Death (VII)  
On the Structure of Psyche Ache

Kumiko MARUYAMA

The purpose of this study is to define the psyche ache as proposed by Schneidman, E. and to find the structure of the psyche ache through the quantificational analysis of Hayashi, C.

The psyche ache is an existential ache such as mental aches, agony, crying in the mind, and so on. Such an emotional system consists of anxiety about death and aging and consciousness of guilt, insults, misery, and suffering. We found three dimensional hypothetical structures of psyche ache, that is, firstly, intervention of self against others; secondly, affinity/care against avoidance / escape from conflict; and thirdly, paternal love (paternity) against co-dependency. Recently, we have seen various suicides due to hopelessness about the future among both aged and young people.

Clinical social psychology offers a point of view that permits us to try to solve the problems posed by the psyche ache.

---

Key words; psyche ache, suicide, existence, cognitive structure, attitude toward life and death

### はじめに

「人はなぜ自殺するのか」という古くて新しい課題に関して、アメリカの著名な心理学者シュナイドマン (Shneidman, E. S.) は、長い間自殺者の心のうちを研究し、1960年にロサンジェルス自殺予防センターを立ち上げるなど、この分野で多くの研究成果をあげた。2004年に上梓された「アー

サーはなぜ自殺したのか」はその集大成であろう。シュナイドマンは1968年に全米自殺予防学会を創設し、その学会誌「自殺と自己破壊行動」の初代編集長を務め、長期にわたってカリフォルニア大学ロスアンゼルス校 (UCLA) で「死生学」を講義した。

自殺学の研究はフランスの社会学者デュルケーム (Durkheim, E.), アメリカのファーバー (Farber, M.) によって研究された。その後フロイトの流れを汲むシュナイドマンは自殺の分類を死への態度にしたがって4つのタイプに分類した。1) 本人から死を希望する希死者, 2) 自然死を早めようとする餓死者, 3) 肉体の死が存在の終末とは信じない死の無視者, 4) 生命を賭けようとする賭死者である。因にメニンジャー (Menninger, K) はフロイトのエロスとタナトスの本能説を発展させ、自殺の動機を以下の3つに分けている。1) 殺したい願望, 2) 殺されたい願望, 3) 死にたい願望である。(注1)

シュナイドマンの自殺者の孤独な魂の叫びに関する多数の著書を参考にすれば、21世紀の類廃的な青年たちの孤独の深淵を垣間見ることができる。さながら、芥川龍之介の「藪の中」、のちに映画化されて反響を呼んだ「羅生門」に描かれているように、真実は見人によって異なり、自殺者本人の実像を的確に把握することは難しい。一人の人間の自殺とその遺書から多くの多様な意見や感想が語られても、なおその真相は闇の中である。この自殺という人間にしか与えられない生死の自主的な選択を、今日では自殺とはいわず「自死」と表現している。ところで、実存とは「真実に存在する」から派生した造語である。したがって、実存的に生きるということは真実に生きるということである(北森, 2004)。青年期を特徴づける疾風怒濤の時代には自己の存在の証明をするために、現在の自己の生き方を真摯に眺め、反芻し、且つ煮詰めて考えるようになる。すると、自分の本当の姿が見えてくる。デンマークの実存哲学者キルケゴール (Kierkegaard, S.) は「不安の概念」のなかで不安は目眩に例えることができると言っている。すなわち、「大きく口を開いた深淵を、その目でのぞきこんだ人は目眩を覚える。だがその原因は何かと言えば、それは深淵であると同様に、彼の眼でもある。なぜなら、彼がじっとのぞき込みさえしなければ良かったのだから。このようにして、不安は自由の目眩である。このめまいが起こるのは、精神が総合を指定しようとし、自由がそれ自身の可能性をのぞき込み、そこで自分自身を支えようとしている有限性に捕まろうとするときである。この目眩の中で、自由は倒れる。心理学は、これ以上に出ることもできなし、またでようとも欲しない。まさにその瞬間に、すべては一変し、そして自由が再び立ち上がったとき、自由は自分が罪責のある身であることを見出す」。(注2)

上記のキルケゴールの意図することは、自殺者の自由を説きながら、その自由がどこから来ているのかを悟ることによって、自殺を選択する自由を奪われることを知るようになるというのである。その場で彼らは、自由を越えた超越者の存在を悟るようになるのだが、そこに行き着く前に自殺してしまうことが多い。青年が救いを求めて教会の門を叩いたり、僧院を訪れたり、或いは怪しい新興宗教にのめり込むのは以上のような精神状態が彼らを支配しているからである。これらを前提と

して、現代青年たちの実存的苦痛の状態を分析し、精神的痛みの結果、何が彼らの心に起こったのかを調査分析する。

#### 実存的痛みに関する態度測定

QOL 評価測定尺度の研究が隆盛を極めて以来、既に半世紀を越えたが、基本的には日本と欧米諸国の死生観や宗教的態度が異なるために、これまでの QOL 評価測定尺度は日本人には該当しない事例が多々見られた。従って、WHO が提唱する終末期の患者の QOL 測定尺度において、最も重要な側面をもつ生死に対する日本人の社会心理学的態度の分析が急務である。そのため、スピリチュアリティの測定可能性に関する研究（丸山，1997，2001，丸山，加藤，2000）が行われた。この種の問題は、今日の社会において、患者のプライバシーや、死に逝く人の魂（霊性）の平安などを QOL 評価測定尺度で測定することは困難であることを意味する。それ故、現在大学に学んでいる男女大学生の実存的痛みを測定することによって、終末期にある患者のスピリチュアリティを測定することの代替とした。

研究目的：青年期における実存的痛み（魂の叫び）に関する感情と欲求の次元構造を抽出し、現代青年の苦痛の様相を検討する。

実存的痛みの定義：実存的痛みとは精神の痛み、心の痛み、苦痛、疼き、悲惨の感じを表す言葉で、シュナイドマンのサイキエイク（Psyche ache）を総称して「実存的苦痛」と定義する。サイキエイクは恥じ、罪、惨めさ、悲しみ、悲哀、老いる恐れ、死の不安などを伴う感情体系を持つ。

被験者：S 学院大学人間福祉学科に属する男女大学生，男子115名，女子68名，合計183名。彼らは犯罪心理学，臨床社会心理学演習を履修している 2 - 4 学年に在籍する学生である。（なお，2003 年度の調査では男子104名，女子88名の合計192名）

調査日時：2004年 6 月中旬，調査項目の一部は参考資料参照。

#### 結果の考察：

先ず初めに、2003年度の調査の結果を取り上げてみよう。彼らのこれまでの苦痛の体験で最も注目すべき事柄は「いじめ」の体験、「人間関係・友人関係」がうまく行かない事が大勢を占めていた。その他、彼らの苦痛体験は両親の離婚、ペットの死、失恋、重篤な疾患（アトピー性皮膚炎）の不快な体験を適して、不安や苦痛、孤独が生じ、自殺念慮に駆られたという。このような辛い状態を他の言葉で表現すれば、次のような苦痛の状況が明確となる。例えば、心を手で締めつけられるような感じ、透明人間に殺されそうになった感じ、自分が世界から弾き飛ばされ、誰からも必要とされない邪魔な存在、戦争でたった一人取り残され生き残ったような孤独感、拷問、閉じ込められた箱の中からどのようにして出ようかと苦しみもがいている感じなどである。自殺未遂者の証言によれば、学生たちが述べるような絶対の孤独、孤立、世界の涯に、ただ一人存在している寂滅の孤独

感が身边を覆っているという。順風満帆のように見える人生の端々においても、こうした孤独感は押し寄せ、少しの刺激によっても自殺願望が忍び寄る。それは、人間が誕生したときから、人間自身の個性の中に自殺への欲求の要素があるとシュナイドマンは指摘している。全ての自殺行為はそれぞれに個性を持った人々の心の内部において起こるのである。

人生の大半は何ら代わり映えのしない単調で平凡、月並みで習慣的で感激のない時間の連続である。しかし、人間にはこのように平和な時間の中でさえも精神的な苦痛があり、不幸な感覚が潜在している。表面は明るい太陽の下にあっても、その半分は暗闇の世界に占められ、悲しみ、恥じ、屈辱、恐れや不安が人の心の底に隠れ潜んでいる。これらの否定的な感情は、ある日何気ない苦痛が訪れたとき、こうした平和な時間の中に忍び寄り、心理的苦痛や混乱を生じさせ、気が転倒し、心の調和が破れ、実存的苦痛が訪れ、自殺に結びつくことになる。<sup>(注3)</sup>

自殺は実存的痛みからの逃避であり、心の動揺と死を望む意思は自殺を生み出す動因となる。肉体的痛みは鎮痛薬で完治するが、実存的痛みは死を願う願望によってのみ治る。肉体的痛みは無痛症でない限り、人は様々な仕方で痛みを体験している。今ここに在る自己の存在をこの世から消し去りたいという願望成就によってのみ、その痛みから解放される。アメリカの心理学者ジェムス (James, W.) は意識の流れについて詳述し、自殺とは耐えることのできない意識の流れを断ち切ることによって、苦しみを減少させたいという願望であると言う。さらにジェムスは述べる。「個性は感情が存在することによって成立する。生気を欠く感情の領域、すなわち、性格の暗く盲目な層こそ、我々が真の事実を掴み、出来事がいかに誕生するかを直接認識し、如何にして事が成されるかを理解しうる世界でただ一つの場所 - 生を中心 - である」。

生理的欲求を満たされた人の求める精神的欲求には多様な側面があり、アメリカの心理学者マレー (Murray, H.) は「個性の探求」において、人が生涯にわたって追い求める精神的欲求について述べており、そのなかで、自殺に導く欲求の強さを著名な歴史上の人物や文学作品の中に登場する架空の人物、例えば、メルヴィルの「白鯨」に描かれているエイハブ船長などについて採点し、20項目の精神的欲求が、彼らの場合、どのような比重を占めているかを評価している。<sup>(注4)</sup>

さて、学生たちの味った苦痛の体験には大きな不安や自己嫌悪、孤独、悲哀の感情が伴う。2003年度の調査のデータを数量化法パタン分析によって分析した結果を図示したものが図1～図3である。過去の実存的痛みが伴っている欲求の認知構造図である。それによれば、第1次元は他者との関係、他者への介入の結果から派生した欲求が満たされずに苦痛が広がる「他者関係を維持しようとすることからくる苦痛」と読める。第2次元は自分を危険な状態から防衛し、苦痛を回避する「他者関係からの苦痛の回避」、第3次元は他者を支配し影響を与えたいという欲求から生ずる苦痛であり、「他者関係への影響力の行使に伴う苦痛」である。彼らの実存的苦痛は、概ね人間関係から派生するもので、その中心を成すのは、「自己介入」と言う3つのタイプをつなぐ媒介概念である。他者との葛藤から実存的痛みを生み出し、自己意識を高めて、出来るだけ自己コントロールするた

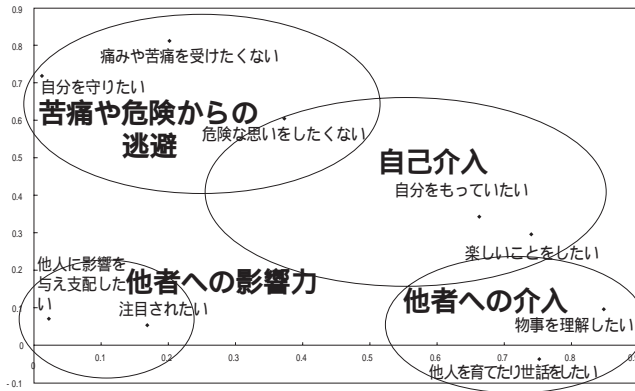


図1 実存的痛みがひきおこす事項の2次元布置図(1-2)

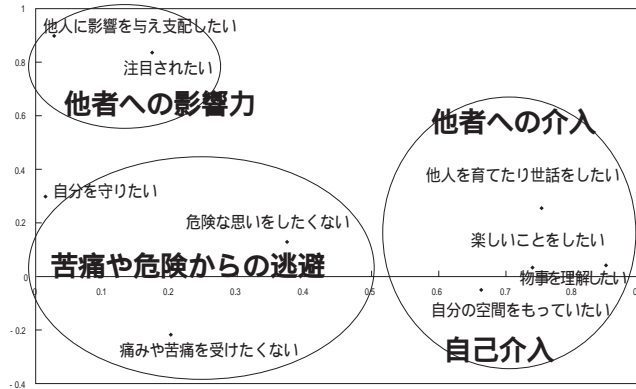


図2 実存的痛みがひきおこす事項の2次元布置図(1-3)

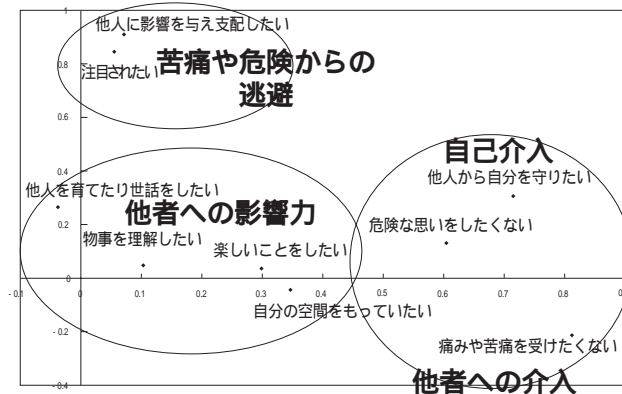


図3 実存的痛みがひきおこす事項の2次元布置図(2-3)

めになんらかの方法を考え、自らの実存的痛みを緩和するように動くのである。その結果、自己コントロールがうまく行かず、実存的痛みのみが助成されると、身心症、神経症に悩まされ、極度の疲労から自殺念慮に至り、自殺を実行してしまうまでに追い詰められる。確かに、調査結果からも、これらの苦痛を回避するために自殺を考えた学生は90%おり、自殺未遂に終わったものの、尚心の中では血を流しているケースも少なくはない。翻って、高齢化社会における老人の自殺が増加しているが、彼らの実存的痛みの欲求は絶望の中で自殺する「死にたい」願望である事が実証されている(注1参照)。

本調査の結果は表1に示している通り、不安、自己嫌悪、悲しみ、孤独、無力感、捨てられる恐れである。親から捨てられる恐れを抱いているとすれば、精神が未熟な子供の心を反映しているかに見える。因みに、表2に示している通り、2003年度、2004年度の調査の結果を比較してみると、絶望は無力感に、怒りは捨てられる恐れに変化している。学生の精神構造が次第に脆弱になっている事を示してはいないだろうか。(注5)

項目	N
不安	71
自己嫌悪	60
悲しみ	57
孤独	45
無力感	37
捨てられる恐れ	33
絶望	25
怒り	23
苦痛	23
死の恐怖	20

11位以下の項目  
 混乱、失敗、怖れ、助けの無さ、希望の無さ、不足感、空虚感、反発、悲嘆、恥、無価値観、嫌悪、嫉妬

表1 精神的苦痛と結びつく感情(上位10項目)

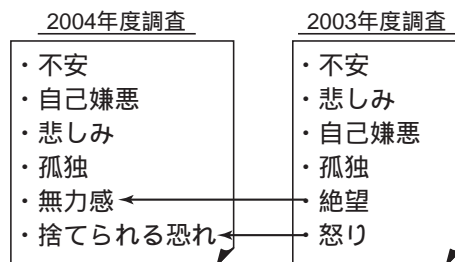


表2 2003, 2004年度調査との比較

本調査によって判明したことは辛い状態について、どのように表現されるかという問いに対して、2003年度では前記のように透明人間や戦争でただ一人生き残った絶対的孤独感などと表現していたのとは異なり、2004年度になると表現は平板になる。身近な動物への言及が多い。それらを列挙すると次のようになる。使われなくなった商品、冷蔵庫の中にずーっといれられればなしの牛乳、迷子の犬、雨に濡れた野良犬、寝不足の犬、踏みつぶされた虫けら、紐でつながれた動物、浦島太郎の乗った亀、穴の開いたコップにそそがれた水、割れたグラス、路傍に転がっている石、屋上にぼつねんと立っている私などである。この調査が実施された2004年5月には連続的に悲惨な少年犯罪が起こった。彼らがこれらの事件によって引き出された感情体系は無力感や捨てられる恐れとなって現れたのかもしれない。図4～6は2004年度の調査結果における実存的痛みの2次元布置図である。それによると、最終的に3つのクラスターが分析によって浮上した。第1次元は「社会からの制約の自由」、「自己保全」、「他人への親和性」である。図7は2003年度、2004年度の結果を統合し

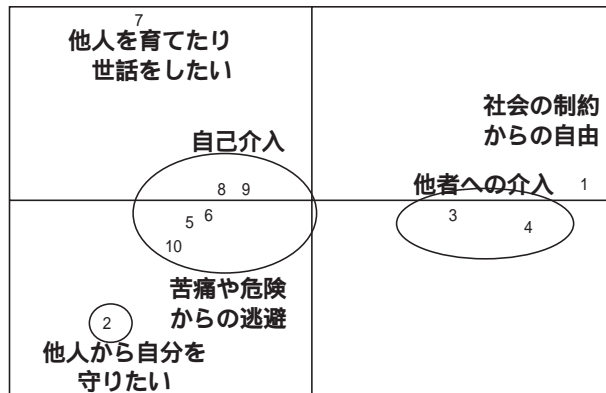


図4 実存的痛みがひきおこす欲求の2次元布置図(1-2)2004年度

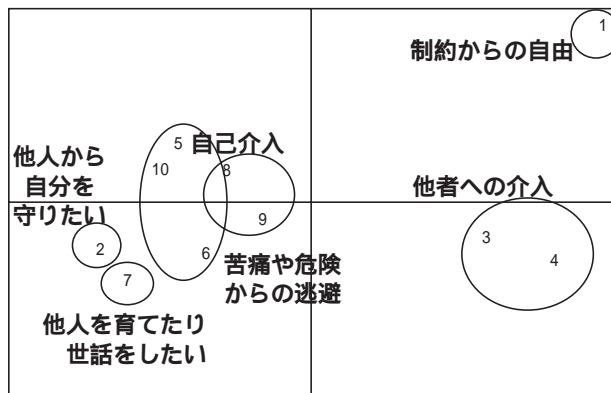


図5 実存的痛みがひきおこす欲求の2次元布置図(1-3)2004年度



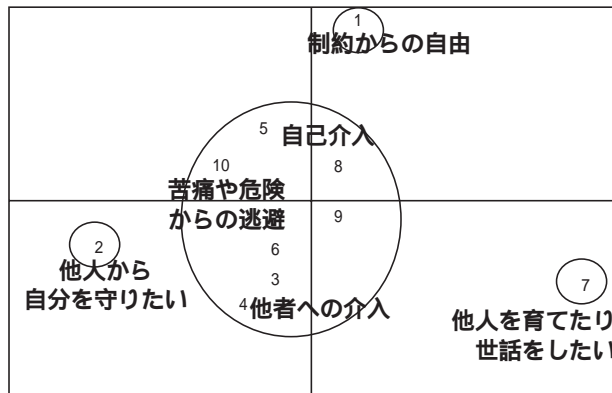


図6 実存的痛みがひきおこす欲求の2次元布置図(2-3)2004年度

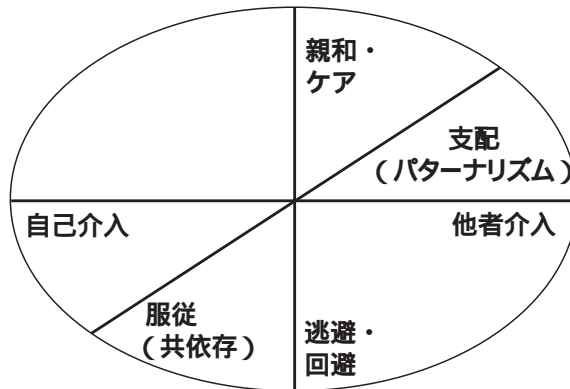


図7 三次元仮想空間

て提示した三次元仮想的認知構造図を示したものである。それによると、第1は他者介入 - 自己介入、第2は親和・ケア - 逃避・回避、第3は支配(パターナリズム) - 服従(共依存)である。人間福祉を専攻する学生達の実存的苦痛は他者への介入であり、親和性、ケアの状態であり、結局は弱者に対するパターナリズムによって、実存的痛みがより一層助長されるものと思われる。

実存的苦痛(サイキエイク)は自殺誘因の一側面である。これまで、青年は荒野をめざしてさ迷い行く孤独な存在であった。しかし、現代青年は自殺願望を持って一人では死なず、インターネットで募集した道ずれとともに自殺する。この孤独への対処行動に愕然とするばかりか、両親を短絡的に殺害した少年達の心の中には基本的に自殺願望があった。荒廃した青少年の魂の叫びを受け止めるための努力を怠るべきではない。又、今日高齢化社会になって老人の自殺率が高くなった。老人はこれまで生きてきた人生に対して誇りを持ち、自信に溢れた残りの生活を成就すべきなのに、子供を大切に育ててこなかったつけがまわったかのように老人虐待が増加するようになった。老人

の自殺は中高年の自殺とはひと味異なる絶望の極みにおける自殺である。老年を豊かに心楽しく暮らし、英知溢れる人生の終末を過ごすことの出来るように、自らの生活環境を整え、青少年の育成にその英知を生かすことこそ、高齢者の果たす役割であると思われる。

参考資料

苦痛と関係する感情 (2004年度調査用紙)

私の苦痛は以下のような感情と関係しています。  
該当するものに3つ丸をつけてください。

- 1 捨てられる恐れ 2 恐れ 3 無力感 4 怒り 5 悲嘆  
6 反発 7 苦痛 8 助けのなさ 9 悲しみ 10 不安  
11 希望のなさ 12 自己嫌悪 13 混乱 14 嫌悪 15 恥  
16 絶望 17 不足感 18 恐怖 19 空虚感 20 嫉妬  
21 無価値感 22 失敗 23 孤独 24 その他( )

実存的苦痛の評価尺度 (2004年度調査用紙)

私の過去最悪の実存的苦痛は以下のような欲求と関係しています。  
測定尺度に丸をつけてください。

1は最も当てはまる、5は最も当てはまらない

		評定尺度段階				
1: 社会の制約からの自由	1	2	3	4	5	
2: 他人から自分を守りたい	1	2	3	4	5	
3: 他人に影響を与え、支配したい	1	2	3	4	5	
4: 注目されたい	1	2	3	4	5	
5: 痛みや苦痛を受けたくない	1	2	3	4	5	
6: 自分の空間を持っていたい	1	2	3	4	5	
7: 他人を育てたり、世話をしたい	1	2	3	4	5	
8: 楽しいことえをしたい	1	2	3	4	5	
9: 物事を理解したい	1	2	3	4	5	
10: 危険な思いをしたくない	1	2	3	4	5	

統計処理では3を除き、1 - 2を「Yes」、4 - 5を「No」として分類した

注

注1: シュナイドマンはメニンジャーの自殺の動機に関する3類型を青年期、中年期、老年期について調査した。結果は以下である。

	殺したい願望	殺されたい願望	死にたい願望	不明
青年期	31%	27%	23%	19%
中年期	23%	16%	35%	26%
老年期	11%	10%	57%	22%

その結果、青年期は殺したい願望、中年期は殺されたい願望と死にたい願望、老年期は死にたい願望が自殺の動機になる可能性が大きいと思われる。

注2: キルケゴールの「不安の概念」は1844年に出版された。不安の概念のモチーフはキリスト教的教義学からくる原罪の問題である。しかし、「不安の概念」は原罪の問題を単に神学上の抽象的な教義学から分離して、極めて心理学的な考察を行っているのが特徴である。キルケゴールは不安を素材にして心理学という人間にとって最も身近な心理学的現象を扱う学問を手掛かりにしながら、原罪に関する

る考察を行っている。

注3:人間には二面性があり、表面とは裏腹に無意識の深層の中に眠っているかに見える第二の自己が存在する。これをドッペルゲンガー(分身)という。ドッペルゲンガーは影法師とも訳される。キリスト教的教義においては原罪ともいえる。常に片時も離れず自分に付きまとっている第二の自己は原罪の故に肉欲的存在者となる。第二の自己は日常的には余程の感性の強い人間、或いは病的な人間以外には顕現しないが、夢の中では屢々現れる。精神病理学では解離性同一性人格障害という。

注4:マレーがその著書「個性の探求」の中で示した20の精神的欲求リストは以下である。1:屈辱, 2:達成, 3:友好, 4:攻撃, 5:自律, 6:反作用(反撃することによって、失ったものを取り戻し、肩を並べたい), 7:防衛, 8:支配, 9:尊敬, 10:顕示, 11:回避, 12:神聖(自己と自己の精神的空間を確保する), 13:養育, 14:秩序, 15:遊び, 16:拒否, 17:感覚, 18:恥の回避, 19:援助, 20:理解。精神的欲求を評価された人物は、ナポレオン、ヒトラー、マリリン・モンロー、エイハブ船長、メルヴィル、ジョンソン、アダムス、ジョーンズ、ゴッホ、ファインマン。

注5:キルケゴールは「死に至る病」において、自己と他者との関係を実存哲学的見地から次のように述べている。即ち、自己は精神であり、他者との関係において確立されるものである。死に至る病は、絶望のことであり、絶望は「関係としての自己」が無残に取り崩されて行く事に対する不安として生ずる。青少年は無意識のうちにあるがままの実存的自己を認識するまで、このような不安や絶望を抱いたまま他者から見捨てられる事を恐れている。孤独は青年期特有のものであるが、孤独を構成している要因は「死に至る病」そのものであり、他者との関係を断絶して山奥に逃避しようとしても、健全な魂はそれを欲せず他者から「愛されたい」と切実に願う。あるべき実体的な自己としてではなく、真実に存在しようとする実存的自己との間で、激しい内なる闘いを展開している。これらの葛藤から解放されるためには、毅然として内なる実存的自己と実体的自己との間に折り合いをつける事が、人生の発達段階において不可欠な事象であることは言うまでもない。

#### 参考文献

- 小川圭治,「キルケゴール」,人類の知的遺産 48,講談社,1979(引用文献,「不安の概念」,1944,「死に至る病」,1849)
- 小此木啓吾,「フロイト」,人類の知的遺産,56,講談社,1979
- 北森嘉蔵,詩篇講読,教文館,2004
- 丸山久美子,QOLD 評価測定尺度に関する基礎的研究( ),「聖学院大学論叢」第9巻第2号,139-156,1997
- 丸山久美子,QOLD 評価測定尺度に関する基礎的研究( ) - Spiritual Pain の測定可能性 -,「聖学院大学論叢」第14巻第1号,101-118,2001。
- 丸山久美子(a),犯罪心理学特講 - 実存的極限状況の心理 -, プレーン出版,2005
- 丸山久美子(b),臨床社会心理学特講 - 人間関係における社会病理 -, プレーン出版,2005
- 丸山久美子,加藤 淳,QOL 測定尺度における「死生観」の問題,第1回QOL学会大会発表論文集,2000。
- Meninnger, K. A., Man against himself, Harcourt, 1938(カール・A. メニンジャー,「おのれに背くもの」,草野栄三良訳,日本教文館,1963)
- Schneidman, E. S., Definition of suicide, John Wiley, 1985(E・S・シュナイドマン,「自殺とは何か」,白井徳満,白井幸子共訳,誠信書房,1993)
- Schneidman, E. S., The suicidal mind, Regina Ryan, 1996(E・S・シュナイドマン,「自殺者のこころ - 生きていきのびる道」,白井徳満・白井幸子共訳,誠信書房,2001)
- Murray, H., Exploration in personality, Oxford Univ. Press, 1938
- James, W., The varietis of religious experience, Longmans Green, 1902(ウィリアム・ジェームス,「宗教経験の諸相 - 人間性の研究」,比屋根安定訳,誠信書房,1957)